

「終わらない愛の希望に」

I コリント 15:12-22

「しかし、実際、キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となりました」
(20 節)

今朝もわたしたちは「福音」、良き知らせを聞きました。

2000 年前に語られた古びたニュースではありません。現代でも語られ続けるべき「よきおとずれ」です。「イエスさまの復活」。これが全てを^{くつがえ}したというニュースを聞いたのです。イエスさまによって、キリストに結ばれた人の死は、もうただの「終わり」ではなくなりました。永遠の朝に起き上がるのを「待ち望む時」になった。その知らせを今わたしたちは聞いたのです。

もちろん復活したのは、2000 年前のイエスさまただおひとりだけです。でも、これはイエスさまひとりだけの話として語られたものではありません。ぼくたちはイエスさまが「^{はつ穂}初穂」となったと聞いたからです。

初穂というのはたった一本の^{しゅうくわくぶつ}収穫物にすぎません。

でもたんなる一本じゃありません。「最初の」一本です。はじまりを告げる一本です。いやその一本は、全てを^{くつがえ}覆す一本となりました。

なぜなら、実るはずがない場所に実った一本だったからです。

どれだけ^{たがや}耕しても、どれだけ種を^ま蒔いても、決して実ることのなかった荒地の一本です。死だけが支配する^{ふもつ}不毛な荒地です。そう。虚しさだけが支配するぼくたちの荒地です。そこに、神さまの新しい命が実った。それがイエスさまの復活です。

その一本の麦の穂の^{みの}実りは、新しい命のはじまりをつげます。

人々は知ります。この土地は、不毛な土地ではなかった。「何をしても無駄だ」ともう思わなくていい。これからは、この地に命があふれていく。死だけが支配するモノクロの世界が、^{あざやかな}鮮やかな^{こがねいろ}黄金色に変えられていく。この荒地が^{あざやかな}麦畑にかえられ、人々のため息は^{しゅうくわく}収穫を喜ぶ歌になる。ただ下を向いていた^{うつろ}虚ろな顔は、その黄金色の畑に照らされて光り輝き出す。それが、全てを^{くつがえ}覆す。初穂であるイエスさまの復活です。

でも、ぼくたちの人生は「荒地」のようです。

依然として、死が支配しています。ため息が絶えません（なくなりません）。「死者の復活などない」(12節)。そういう声こそが、説得力をもちます。ここに何の実りがあるのか。ここに何の喜びがあるのか。喜びがあるとすれば、この苦しい人生を終えて死ぬことだけだ。自分自身が、塵にかえっていくことにしか希望がもてない。荒地に飲み込まれていく。死に飲み込まれていくことしか希望とできない。そんな人生のようにしか思えないかもしれません。

神さまから遣わされたイエスさまもかつてこの死が支配する不毛な地でこの世界で叫びました！

「神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」(Mk1:15)。

ここに命が実る。ここに神さまの愛が満ちあふれる。あなたたちを神さまは諦めておられない。だからこそ、神さまに向き置ろうって。イエスさまは語り続けた。でも人々は信じられなかった。

ぼくたちもなお信じられえないかもしれません。

神さまがおられることは信じられるかもしれない。イエスさまの復活があったということも信じられたかもしれない。でも、この世界に命があふれていくということは信じられない。自分のこの体が、復活するということは信じられない。体の痛み、愛するものを失った悲しみに、やるせない後悔にぼくたちの心はもうむしばまれている。神さまに期待する気力もなくなっている。神さまに向き置ることもできない。できたように思えてもまた、もどってしまう。その虚しさの中で死だけが救いのように思えてしまう。

だけどイエスさまは諦められませんでした。

「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。

だか、死ねば多くの実を結ぶ」(John12:24)

そうおっしゃいました。イエスさまはこの不毛な荒地で死ぬことを決意されました。

虚しさと諦めと後悔だけが確かなこの死の世界が、神さまの命あふれる場所だと信じて。人々のため息が歌声に変わることを信じて。自分たちの人生が無駄だったとしか思えない。そんなぼくたちの涙も枯れたこの顔に、喜びの涙をもたらすために。イエスさまは十字架におかかりになりました。

イエスさまが身を投げ出された十字架。

この十字架こそが「不毛な荒地」でした。ただ死を待つだけの場所です。痛みつけられ辱められ全てを失っていく。あの十字架は、虚しさだけが確かな「ぼくたちの人生」です。ため息と後悔だけがたしかな、「ぼくたちの生きる世界」そのものです。一刻も早くその苦しみから逃れて死ぬこと。それくらいしか希望がもてない。もはや「なんで生きているのか」すら分からない。命を望むことも、神さまに期待する信仰だって奪われる場所です。すべてが死に飲み込まれ無駄になっていく。不毛な荒地。まさに「ぼくたちの人生」です。

でもイエスさまは諦めませんでした。

それでもなお、この「不毛な荒地」に生きるぼくたちを救うために。あの十字架から逃げることも降りることもしなかった。あの十字架こそが、ぼくたちの生きる場所だからです。ぼくたちが嘆き悲しみ後悔したため息をつきただただ死を願う。ぼくたちの生きる場所だからです。そこにこそ、命をもたらすために。イエスさまは逃げなかった。苦しみの死を、虚しさだけが支配する死を最後まで生き抜いた。いや死にきつた。ぼくたちの「虚しい死」を死にきつてくださった。この不毛な土地に、命をもたらすために。ぼくたちの不毛としか思えない人生にこそ (!) 実りをもたらすために。

そして、奇跡が起こった。

イエスさまの思いは、神さまの愛はついに実ったんです。ぼくたちの不毛な人生を変える「初穂」となりました。イエスさまは復活した。この復活が、死に終わる虚しい人生を生きる全ての人々の希望となったんです。イエスさまが「初穂」となられた。このイエスさまの復活が、死で終わる世界の大きな転換点となりました。

もし、この初穂が実らなかったなら。

世界はいまもなお「不毛な地」で、苦しみから逃れる「死」こそが救いだと言われ続けるでしょう。もし、この初穂が実らなかったなら。神さまのいかなる憐れみも救いも、信仰も死の苦しみからぼくたちを救えない虚しいものでしょう。

「しかし、実際キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となられました」

(20 節)

この世界は、死で終わるのではなく「イエスさまに続くもの」となりました。

生きとし生けるものの死は、終わりではなくなりました。復活の命、「収穫の実り」をまちのぞむときとなりました。

今日は、召天者記念礼拝です。

宮崎中部教会は100年目の歩みをしていますから、既に召された方々がたくさんおられます。

もしイエスさまの復活がなければ、彼らの死は、ただの滅びであり、ぼくたちは世界で最も惨めです。今日の聖書ははっきりとそう語ります(18-19節)。でもイエスさまが復活されたからこそ、彼らの死は、終わりではなくなったのです。そして、だからこそ断言できます。彼らの人生は、どんな人生でも決して「虚しくない」。「虚しくなんかない」。たとえどんなに空っぽだった人生にみえても。苦しみや嘆きしか残らないような死であっても。そこそこが神さまの「新しい命」が実る場所だからです。まさにそのような死を十字架で迎えたイエスさまこそが復活されたからです。彼らは起き上がる日を待っている。そう信じています。

この死だけが確かに見える世界で、復活を信じるのはバカバカしいことかもしれません。

この世界のどこに草一本すら生えない「不毛な荒れ地」で種まきをする人がいるのでしょうか。「不毛な荒れ地」に蒔かれた種の実ることを楽しみに待っているのでしょうか。しかし、わたしたちは待ち望みます。なぜなら、ここがもう「不毛な荒れ地」ではなくなったからです。ここに、やさしい風に揺られながら楽しそうに踊る「一本の初穂」が力強く生えているからです。この世界は、神さまの新しい命の芽吹き実る場所となったからです。

だから、この初穂であるイエスさまを見つめるとき。

わたしたちには「希望」が湧いてきます。このイエスさまをこそ褒め称えて生きる歩みにすでに「喜び」があります。もちろん、この世界は依然として「荒れ地」のように見えます。でももう「荒れ地」じゃないことをぼくたちは知っている。ここに一本の麦があるからです。

先に死んでいったぼくたちの教会の先輩たちも、

この「初穂」であるイエスさまを見つめて「荒れ地」を生き抜きました。このイエスさまを礼拝し褒めたたえ続けました。この「荒れ地」に「収穫の実り」がはじまったことをここで告げ知らせました。この「虚しい荒れ地」にため息をつき続けたのではありません。歌を歌って生きたのです。初穂をみて「収穫のときは近い」と。イエスさまを褒めたたえて歌って生きた。もちろん虚しさに打ちひしがれるようなときもあったでしょう。でも、この初穂である復活のイエスさまは変わらない。ぼくたちのために十字架にかかって死なれ、神さまの愛に満たされて楽しそうに

生きられるイエスさまの姿をみては、励まされて生きたにちがいありません。ぼくたちもこの歩みに続きます。初穂となられたイエスさまに続いていった先輩たちの歩みに。
そう。イエスさまに続いて歩みます。

「しかし、実際、キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となりました」
(20 節)

このみ言葉を胸に。新しく歩みましょう。祈ります。

父なる神さま。

生きるのがつらい。苦しい。むなしいぼくたちです。愛するものを失った悲しみに、自らの生きる気力すらもそがれてしまっているぼくたちです。この世界でたしかなものは死だけしかないと思えなかったぼくたちです。しかし、ここにこそイエスさまがおられました。あの十字架こそが、つらく苦しくむなしいこの世界そのものでした。あなたは、残酷ともおもえる世界に、新しい命を实らせてくださいました。そればかりか、その新しい命をわたしたちに与えてくださいました。感謝いたします。どうぞ、初穂となられたイエスさまを見上げさせてください。収穫の時は近い。イエスさまをたたえ歌いながら歩いていった先達の歩みに続いて歩ませてください。

イエスさまのお名前によって祈ります。アーメン